

本書は新島襄の妻・八重の波瀾万丈の生涯を、資料に基づいて綴った伝記である。入門書であると同時に研究書としての内容も有している。全体は三部構成となっており、それぞれ異なる視点から八重を立体的に描いている。第一章では、その人生を前期「会津のジャンヌダルク（戊辰戦争）、中期「ハンサム・ウーマン」（新島襄の妻）、後期「日本のナイチンゲール」（篤志看護婦の三期に分け、各時代における八重について、感動的なエピソードを交えながら概説している（末亡人時代が一番長

新島八重 愛と闘いの生涯

吉海直人（女子大学学部教授）著



角川学芸出版
1,680円（税込）

い）。第一章を読めば、八重の86年の人生が俯瞰できるはずである。続く第二章では、これまでほとんど注目されなかった八重の交友について、9つのテーマに分けて論じている。ここが本書で一番力を入れたところである。板かるたや八重歌集など、本書で初めて言及したものも少なくない。第三章は資料集として、八重の懐古談四つと集成記事一つを掲載している。特に「新島八重子刀自懐古談」は、著者所蔵以外に現存が報告されておらず、資料として貴重であろう。それ以外に、八つの興味深いコラムを付けた「荒城の月」や「お離様」のことも、本書独自のものも少なくない。また多くの図版を掲載することで、今まであまり注目されることのなかった八重の生涯を、わかりやすかつ的確に描いている。本書から前向きな八重の生き方を学び、自身の人生の参考にしていただきたい。

著者より

まさに波瀾万丈というべきか。世にはまるで絵に描いたようだと、眼をみはらされるような人生もある。新島八重もそんなひとりである。

会津藩砲術指南役の娘に生まれた彼女は、明治元年（1868）の戊辰戦争で、断髪男装の出で立ちで、七連発の新式銃をとって籠城戦を戦いぬいた。女性でありながら近代兵器というべき銃砲に眼を向けていた女性、は彼女のほかにはいない。

戦いに敗れたあと、兄寛馬をたよって京都にやってくる、英語を学び、キリスト教にも接近、新島襄と結婚、洋装洋髪のカリスチャンレディーに生まれ

新島八重 おんなの戦い

福本武久（法政大学学部教授）著



（角川oneテーマ21）新書
角川書店
780円（税込）

八重はまさに近代女性の先駆者をなす存在といえるが、それゆえに近代と前近代との狭間に立ち、女性ゆえの凄まじいばかりの戦いがよこたわっていた。

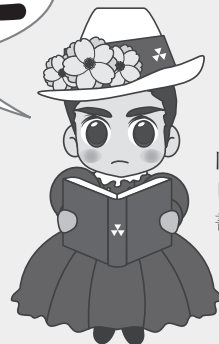
「女（こ）ども」とひとくくりには、女が人間であることを認められていなかった時代にあつて、八重は自立したアクティブな女性として、果敢にチャレンジしつづけたのである。

本書は当時の時代背景や、同じ会津女性で戊辰戦争の洗礼を受けた大山捨松や若松貞子の生きざまにも目配りしながら、八重の「戦い」に光を当てた人物ドキュメントである。著者より

特集

もっと

知りたい！ 読んでみたい！



同志社の教員や卒業生が執筆した「新島八重」をもっと知るための書籍5冊を紹介します。

新島八重関連書籍紹介

新島八重と夫、襄

会津・京都・同志社

早川廣中（白虎隊記念館館長）著

本井康博（天学神学部教授）共著

本書は、2012年12月28日に出版した「新島八重と夫、襄」の増補改訂版です。会津若松市・白虎隊記念館の早川廣中館長の依頼で、共著にしました。

ありがたいことに、いくつかの出版社から八重の伝記や監修のお話がありましたが、すべてお断りしました。これまでの「新島襄を語る」シリーズ同様に、自費出版で行います。例外は、本書です。福島復興に役立てば、という気持ちからです。

初版は、NHKが2013年の大河ドラマを「八重の桜」にす



思文閣出版
1,260円（税込）

と、同年6月に公式発表してから、最初に世に出た八重の本でした。いささか急ぎましたので、今回、リメイクです。カラー口絵ページを設けて、会津に残る八重の書を紹介したり、新島襄・八重の略歴や山本覚馬の年譜、追悼文を補充しました。人名索引も新設しました。

すでに類書が、何冊か出版しております。最終的には、マンガやガイドブック、小説、伝記など、おそらく30冊くらいになるのではないかと思います。その中で本書は、八重に関する入門的な「読み物」です。けれども、できるだけ資料に則して作りしました。一般の読者には、はなはだ読みづらい古い資料もいくつか、そのままの形で入れました。客観的な叙述を心がけたいという意図の表れです。

八重を手軽に知る書として、まず最初に手にとっていただければ、うれしいです。

本井康博（天学神学部教授）

小説・新島八重

会津おんな戦記



515円(税込)

ふくもとたけひさ
福本武久 (1965年大学法
学部卒・作家) 著

新潮文庫



620円(税込)

小説・新島八重

新島襄とその妻

日本の近代は砲弾が地ならし
して幕あけた。

明治元年(1868)の戊辰戦
争、新政府軍は会津・鶴ヶ城に
攻めかかった。そこで女こども
はどう生きたのか。

足手まといになるのを懸念し
て、ある者は郊外に逃れ、恥辱
を受けてはならぬと、ある者は
自刃し、そしてある者は城に入
って藩公と運命をともにするこ
とを決意した。

兵糧炊き、傷兵の看護、弾丸
づくり、砲弾消し……。入城し
たおよそ六〇〇人の婦女子は裏
方にまわって戦闘を支えた。だ
が、そんな女の仕事だけでは満
足できない女丈夫がいた。山本
八重、後の新島八重である。

会津藩砲術指南役の家に生ま
れた八重は七連発のスペンサー
銃を手にして夜襲に出撃、砲隊
を率いて迎撃した。城は落ちな
かったが、戦いに敗れ、藩家は
斃れた。家屋敷を奪われただけ
でなく、父をうしない、夫とも

別れなくてはならなかった。

『小説・新島八重 会津おん
な戦記』は、そんな八重の若き
日の戦い、愛と別離、そして新
しい旅立ちを描いている。

会津戦争を高みから見おろす
のではなく、あくまで八重とい
うひとりの女性の視点、いわば
「兵卒」の目線から描き、八重
の人間としての真実に迫ろうと
した小説作品である。

『小説・新島八重 新島襄と
その妻』は、その八重が兄の寛
馬を頼って会津から入洛、新島
襄とともに暮らした時代を描い
ている。

京都にやってくるなり、八重
は英語を学び、キリスト教にも
接近、そして新島襄と運命的に
出会って結婚、洋装洋髪の様
なレディーとしてよみがえった。
だが、それは八重にとって、ま
た新しい戦いの幕あけでもあつ
た。当時、キリスト教に入信す
ること、さらには耶穌と後ろ指
をさされる男と結婚することな

ど、ただならぬ男気のいること
で、周囲すべて敵にまわすに等
しかった。だが、八重はいつさ
い怯まなかった。キリスト教へ
の根強い偏見、政府や京都府の
妨害など困難をのりこえて同志
社を築いた襄を支えつづけ、近
代日本の幕あけを颯爽と駆けぬ
けたのである。

そんな八重の生きざまには開
化期の日本人女性が背負わなけ
ればならなかった文化的な軋轢
があちこちにある。近代と前近
代との狭間に明滅する女性ゆえ
の凄まじいばかりの孤独な闘い、
それが本作品のライトモチーフ
になっている。

もともと両作品はそれぞれ独
立した作品として発表したもの
だが、対をなすものであり、文
庫化にあたって人名表記を統一
した。なお両作につづく第三弾
として、近く『小説新島八重
美德をもって飾となす』(仮題)
が登場する予定である。

著者より